

# 日本語作品の翻訳をめぐる問題—王昶雄「奔流」を例に

李 郁蕙

広島大学大学院総合科学研究科

## Problems with the Translation of Japanese Literature in Taiwan

Yuhui LEE

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

### Abstract

Wang Chang-Hsiung's *A Raging Torrent* is used as a text to consider the various problems arising from the situation that the Japanese literature from the Japanese colonial period in Taiwan is generally being read through Chinese translations. No notable differences were confirmed between the two Japanese versions. One was published for the first time in July 1943 and the other was rerecorded in the "Taiwanese Novel Collection" published in November 1943. However, seven versions of the Chinese translations published between 1979 and 2002 contained significantly different content after revisions by the author. Previous studies have pointed out that this could be a way for the author to avoid moral/ethical criticism. On the one hand, the possibility that the translation will be changed intentionally is the first problem. On the other hand, even if the translation is not changed intentionally, a seemingly simple proper name such as a historical term or place names may fall out of alignment with the original composition presented by the translation method. Finally, the second problem was clarified by showing concrete examples among the translated Chinese versions.

### 抄録

本稿鑑於現今台灣學術界或讀者一般透過中文翻譯閱讀日本統治時代日語作品之狀況，以王昶雄於1943年發表的〈奔流〉為例，探討翻譯過程中可能會產生的一些問題。首先，先針對〈奔流〉刊登於雜誌《台灣文學》與《台灣小說集》收錄的兩個日語版本進行比較，釐清兩者之間並無顯著的差異。其次，再觀察1979年至2002年間出現的7種中文譯本，發現其中有一個版本是經過作者本身大幅修訂改寫的。關於這一點，已有研究成果指出，極有可能是作者為避免受「皇民作家」之辱不得已做出的抉擇，雖說情有可原，但改訂後的主角內心刻劃遠不及原作深刻細膩。除此之外，還有一個從未被提及的問題，就是譯詞的選擇也可能影響作品讀解。本稿所舉的4個例子，分別都是有關台灣人、內地人、日本人等專有名詞的譯法，結論出在翻譯過程中若受到現代歷史觀制約就無法還原日語作品真正的原貌。

## 1. はじめに

日本語作品は台湾文学を構成する重要な要素の一つである。この点について、ここ20年間相次ぎ設置された台湾文学教育研究機関の研究動向から確認することができる<sup>1</sup>。例えば、「台湾文学研究所」と台湾文学の名を冠する8校の大学院で提出された学位論文は、表1のとおり、2016年度までに合計847本ある<sup>2</sup>。うち2割以上の199本が戦前の日本統治時代を対象とし、さらにその6割相当の113本は日本語関連の作品や新聞、雑誌を取り上げている。これらの数字に基づき、台湾文学における日本語作品の構成比は10%を超えると推定され、確固たる一角を占めていることが分かる。

表1 2002-16 年度台湾文学研究所学位論文

大学(設置順)	論文総数	戦後対象	戦前対象	日本語
成功大学	230	169	61	38
清華大学	92	65	27	20
台湾大学	61	43	18	10
中正大学	128	109	19	6
中興大学	193	154	39	15
政治大学	48	29	19	18
彰化師範大学	69	57	12	5
靜宜大学	26	22	4	1
合計	847	648	199	113

そもそも異民族に統治されたいわゆる「負の遺産」たるものがなぜここまで注目を集めたのか。その背景には戦後複雑な政治事情が絡むが、簡潔にいうと台湾文学自体が昨今まで学術的市民権を得てこなかったからである。中国文学こそ正統とする中華ナショナリズムの下で、台湾文学は長い間影に隠れ、亜流の位置づけに甘んじていた。それに対する反動もあって、台湾文学は表舞台に浮上するやいなや、外来統治者による一元的統制が繰り返されてきた歴史に鑑みて多言語・多文化共生を独自性として打ち出した。そこで、日本統治時代の50年間国語だった日本語は復権を果たし、福佬語や客家語、原住民諸語とともに中国語と肩を並べることができたわけである。

けれども、戦後70年以上が経ち、日本語教育を経験したことのある戦前世代は、すでに相当の

高齢に達している。一方、中国語教育を受けた戦後世代は、家庭やマスメディアの影響で日本語に馴染む可能性があるだろうが、ある程度のリテラシーを身に付けるまで一定の学習歴がやはり必要と思われる。要するに、日本語作品を取り上げる場合、一般的には中国語訳に頼らざるを得ないのが現状である。しかも、現在のように再評価されるまで日本語作品を取り巻く環境は決して穏やかなものではなかった。50、60年代の故意的忘却にしろ、70、80年代の選択的批判にしろ、「親日」か「反日」かといった民族主義的価値観が常に先行し、作品そのものよりも作家本人の道徳的責任を問おうとしていた。そんな雰囲気の中、ただでさえ難しい作業である翻訳は、アイデンティティの問題などデリケートな部分まで忠実に再現できるかが疑問に残る。

本稿はこうした疑問から出発し、中国語訳を通じて日本語作品を読む際に生じる問題について考察するのが目的である。方法として、その同化をめぐるテーマに対して賛否両論があった王昶雄(1915-2000)の「奔流」(1943)を例に分析する。原作と訳本、また異なる訳本の比較を行いながら、日本語作品の受容の変遷を明らかにしていきたい。

## 2. 日本語版本の異同

「奔流」の初出は1943年7月『台湾文学』3巻3号である。同年11月大木書房刊行の『台湾小説集』に収録された際、若干の修正または変更が施されている。これについて、2000年ゆまに書房から復刻された同書の巻末で、野間信幸は次のように解説する。

本集収録にあたって作品に加筆が施されており、本篇の主旨が明確化されている。一例をあげると、本文122頁7行目からの一文「そして終始~と思つた」は、初出誌では「要するに伊東と比べて、柏年は餘りにも純真であるからであつた」と書かれていた<sup>3</sup>。

これ以上の説明がないため、氏の真意は分かり

かねるが、文面をそのまま受け止めると、初出に比べて再録では作中の表現がより明確になったということである。具体的に2つの版は何がどう異なるのかを見る前に、まずあらすじをおさらいしておこう。

主人公は伊東春生と林柏年と「私」、ともに本島（台湾）出身の三人である<sup>4</sup>。本名朱である伊東は、内地（日本本土）の女性と結婚するのを機に改姓した。中学校で国文科（日本語）教師を勤めるほど言葉から立ち振る舞いまで完全に内地化を果たしている。伊東の教え子であり、徒弟にもあたる柏年は在学中剣道の稽古に励み、州大会で優勝した実績を持つ。卒業後内地の武道専門学校に留学することになるが、その資金を暗に支援してくれるのが伊東だと知らず、妻や義母と暮らし生みの親を顧みない本人に激しく反発する。そうした二人の関係を語り手として見つめるのは、急死した父の病院を継ぐためやむを得ず10年間の東京生活から帰郷した内科医の「私」である。自分と同じ内地経験者の伊東を「知己」と思う一方で、柏年の強い「正義感」に心を打たれる。この「私」がいったいどちらに賛同を示すかが、本作を読み解くカギになっている。

下の一覧表は、漢字仮名表記の使い分けや句読点、誤字脱字以外に変更があった部分をまとめたものである<sup>5</sup>。全篇を通して合計25か所数えられるが、その多くは単語レベルの置き換えにとどまり、比較的大幅な書き直しは結末に集中している。中でも、最も明らかな箇所は20番目の段落であり、下線が引いてある最後の文が前記の引用で挙げられた例だ。

表2 初出（上段）と再録（下段）の比較

1	むしろ私にはいじらしい程であった。
	むしろわたしにいじらしい程であった。
2	そうですね。彼等には覇気というものがないですね。
	そうですね。しかし覇気がないことだけは、慥かのようなですね。
3	気節も気概もあったものじゃない。
	気節も気概もあったものじゃない。
4	わたし伊東春生です。
	私は伊東春生です。

5	正しい学問に対する憧れの心を喚起させ、気節に対する止め難い思慕の念をそそる
	教養のいかなるものかを匂わせ、気概のある所を吹き込む
6	早いうちから起きた。
	早いうちから出かけた。
7	志を立つる正に第一等の人物たるべし
	志を立つ、宜しく天下第一等のことにあるべし
8	併し何のためらいもなくそれを決行して、
	しかし何の屈託もなくそれを決行して、
9	二人は肚を決めて御馳走に預ることにした。
	二人はとうとう御馳走に預ることにした。
10	お父さんがこの頃とみに体が弱って来て、
	お父さんがこの頃とくに体が弱って来て、
11	黒い洋服に黒い腕章をつけているのである。
	黒い腕章をつけているのである。
12	犬を見てもびくついて逃げ腰だからね。自ら侮って然る後に人これを侮る、という言葉があるが、あんな畜生に侮られてしかも為す術を知らんじゃ、優勝は先ず覚束ないねえ。
	どうも連中は、犬を見てもびくついて逃げ腰だからね。あんな畜生に侮られて、しかも背を向けたんでは、優勝は先ずお預りでしょうな。
13	烈々火を吐くような闘志が凡てを圧倒し得たからであろうか、
	或は発奮した心が、烈々火を吐いて、ついに凡てを圧倒し得たからであろうか。
14	莫迦、貴様に俺の気持がわかるか。
	莫迦、貴様にその気持がわかるか。
15	幾度となく語って聞かせたことを、伊東は囁んでふくめるように云った。
	伊東は昂奮をやっとこさ押えつけ、囁んでふくめるように云った。
16	あの輝かしい優勝という何よりの記念すべきみやげを残して。
	あの輝かしい優勝という歴史のみやげを残して。
17	伊東春生先生と御子さんとは非常に懇意にして居り、
	伊東春生先生と御子さんとは非常に懇切にして居り、
18	やわらない力の漲りをさえ感じる昨今です。
	やわらない力の漲りをさえ感じる昨今ですから。
19	私は何度となく読んでしまった後も、これを手離そうとはしなかった。
	私は読んで了った後も、これを手離そうとはしなかった。

20	<p>しかし正直のところそれにもまして頼もしく思ったのは、柏年の心根であった。海を渡って日尚お浅いとは云いながら、少しも卑屈にはなっていないのである。彼は伊東が学資を仕送る件については、全然気がつかぬらしい。私は安堵の胸を撫でおろしたい気持であった。この手紙は伊東について、少しも記していない。だが恐らくは、伊東の心がだんだんと柏年に分って来たには違いない。が土臭い老母に対する背拒の態度を、この青年はあくまでも罵倒しようと構えて居る。<u>要するに伊東に比べて、柏年は余りにも純真であるからであった。</u></p>
	<p>しかしそれにもまして、柏年の素晴らしい歩み方と、その澄みわたる心根が、どれほど私の心を楽しませてくれたか知れなかった。自分の歩んで来た道をもかえりてみて、しかし私は冷汗三斗の思いがしたのである。こういう青年が現われて、本島青年の成長も、ある段階へ達したといえないだろうか。この手紙は、伊東について少しも記していないが、学資云々の件については、全然気がつかないで居るらしい。私は安堵の胸を撫でおろしたい気持であった。或は伊東の心がだんだんと柏年に分って来たのであろうか。それにしても、あの薄ぎたない老母に対する背拒の態度を、この青年はあくまでも罵倒しようと、構えているように思われてはならない。<u>そして終始何かにおびえて居るような人の抱く日本精神ほど、毒にも薬にもならないものはない、と思った。</u></p>
21	<p>あたりは文字通り下界であった。山や河や対岸の杜という杜、眼下の街の家という家、すべて一様にまばゆい陽光の中に、むしろ煙っているようであったが、</p> <p>あたりは文字通り下界であった。虚に湧り風に御してその止まる所を知らざるが如し—とは、うまい事を古人は文に作ったものだ。山や河や対岸の杜という杜、眼下の街の家という家、すべて一様に陽光の中にむしろ煙っているようであったが、</p>
22	<p>海のおおさが空の色のおおさに溶けて、吐く息までが色づくように思われた。</p> <p>水平線のおおさが、空の色のおおさに溶けて、眺めている中に吐く息までが色づくように思われた。</p>
23	<p>郷土に対する愛着心が足りないことが思われて来るのである。私は伊東から、そして柏年から二つの純真なものと世俗的なものを学んでいるのではないだろうか。私は今後この脚でこの土地をしっかりと踏ん張って行かねばならない。</p> <p>郷土に対する愛着心が足りないことが思われて来るのである。私は今後この脚で、この土地をしっかりと踏ん張って行かねばならない。</p>

24	<p>伊東は俗臭紛々の父母を棄てた罪滅しに、感覚ばかりで激しく未熟な生き方の戦慄を感じる本島青年の薫育の為に、骨身をけずって居るのかも知れない。</p> <p>伊東は土臭い父母を棄てた罪滅しに、感覚ばかりで、絶えず未熟な生き方の戦慄を感じる本島青年の薫育の為に、骨身をけずって居るのかも知れない。</p>
25	<p>それでいいのだ、それでいいのだ—と繰り返し繰り返し口の中でしながらも、なぜかあの墓地に於ける情景が、私の脳裡に絶えず明滅してゆくのである。私は泣きたい気持で一ぱいであった。私はたまりかねて、クソ、クソと連呼しながら、丘の上から丘の下へと駈け下りて行った。</p> <p>私は最早ものを考えるのがいやになって、それでいいではないか、それでいいではないか—と繰り返し繰り返し、口の中でしながら、丘の上から丘の下へと駈け下りて行った。</p>

さて、変更前後を並べてみると、初出では「私」は伊東の苦心が分からない柏年のことを「純真」すぎるからと決めつける。再録では、逆に台湾出身であることを堂々と主張する柏年の勇氣に脱帽し、「そして終始何かにおびえて居るような人の抱く日本精神ほど、毒にも薬にもならないものはない、と思った」とあるように感嘆する。前後の文脈からその「何かおびえて居るような人」とは、出身を隠しているにもかかわらず「日本精神」を云々する伊東のことだと推測される。つまり、本来心情的に伊東寄りだった「私」は、改稿を経て柏年の味方になり、その影響で台湾への郷土愛が芽生えていく。これが主旨の明確化につながったということであれば、同化への否定的姿勢が初出に内在しており、再録で柏年の描き方の変化を通してより顕著に表れたと捉えられているのではないだろうか。

しかし、この部分を見た限りでは、確かに柏年の代弁する台湾意識は一段と高まったようだが、「大いなる大和の魂に繋がる」ため両親の期待に背いて武道専門学校を留学先として選んでいる以上、その台湾は結局のところ内地の対立項であっても日本の対立項ではない。また、表2に示したように、この部分以外は字句や表現を練り直しただけの例がほとんどで、総じて全体の構成に影響しないと思われる。言い換えれば、核心の同化問題に関しては、改稿前後でそれほど大きく異なら

ず、どちらの版においてもコンセプトが一貫していると見るのが妥当であろう。

### 3. 中国語版本の改訂経緯

中国語訳は1979年林鍾隆によって初めて行われ、日本語作品への関心が高まる1990年以降も4回にわたって試みられた。計7つのバージョンのうち、3つが初出、2つが再録を底本としている。残りの1つは初出と再録の両方にさらなる修正が加えられたもので、次の表3でいうと最初の林訳に基づいて作者の王昶雄が改訂を施した訳である。修正部分以外は林訳が底本としている初出どおりだが、修正部分は箇所によっては再録と同じものもあれば、異なるものもある。もう1つは頼錦雀による3番目の訳であり、その末尾には底本が再録を手直した王の手稿だと付記されている。ただし、その手稿に関しては、2002年に刊行された全11冊の個人全集にも未掲載であるほか、内容的に類似していることから、おそらく王改訂の中国語版をリライトしたものではないかと思われる。

表3 中国語訳本一覧

訳者名	収録書誌	底本
林鍾隆	『光復前台湾文学全集』遠景出版社、1979	初出
林鍾隆訳・王昶雄改訂	『台湾作家全集』前衛出版社、1991	初出 再録 修正
鍾肇政	『日據時代台湾小説選』前衛出版社、1992	初出
張良澤	『台湾文学評論』第1巻第1-2期、2001	再録
頼錦雀	『王昶雄全集』台北県政府文化局、2002	初出
頼錦雀	『王昶雄全集』台北県政府文化局、2002	再録
頼錦雀	『王昶雄全集』台北県政府文化局、2002	手稿

要するに、日本語版における1回目の改稿に続き、中国語訳を上梓した時、王自身の手によって2回目の改稿がなされた。この度重なる改稿の意味を明らかにするため、前節で初出と再録の異同

を逐一確認してみた。では、再録と再改稿とはどうだろう。これについては、先行研究を踏まえながら考えることができる。例えば、呂興昌は林訳と、大久保明男は初出の日本語版と王改訂版をそれぞれ比較し、作品の構成に破綻をきたすほどの相違があると結論付けた<sup>6</sup>。林訳が初出に準拠していることから、結果的にどちらも再録と直接比較していないままだが、初出と再録の近似性を考えればおおむね問題ではない。むしろ、二氏が指摘するその決定的な相違を生む経緯のほうが注目に値する。

「私」という人物の設定こそ二つの版本における最大の相違点だといえるだろう。

その相違点のなかでも目立つのは、「内地」（日本）や「本島」（台湾）に対する「私」の態度や姿勢の変化である。結論から先に言えば、日本語版における、「私」の「内地」や「内地人」に対する愛着、好感、崇拜、同化志向などについての記述や描写が、改訂版では「控えめ」に、あるいは完全に異なる内容に書き換えられているか、または削除されている、ということである<sup>7</sup>。

大久保の考察によると、王改訂版では三人の人物像がすべて変化しており、とりわけ目立つのが「私」だとしている。伊東や柏年に対する気持ちの書き換えもさることながら、何よりも「私」自身の精神的葛藤を綴る部分の削除が大きく響いたという。その一例として、次の文が挙げられている。

しかし私は内地に居た時分を思い出した。「御郷里はどちらですか」と訊かれた時に、いかなる心理の作用であろうか。大ていは四国か九州と答えた。なぜ私は言下に「台湾です」と答えるのを憚ったのであろう。だから私はいつも木村文六という仮り名を振り翳して行動せねばならなかった。風呂屋へ行っても、おでん屋で飲んでも、この名で通した。そしてひとかどの内地人に成り済ましたつもりで、得意然と肩をそびやかして喋りまくる

のである。たまにはべらぼうめ弁をぬかしては相手を眩惑した。だから郷土訛り丸出しの友人と一緒にいる時は、台湾人だと感づかれはせぬかと、私はひやひやせねばならなかった。そしていよいよ化けの皮が剥がれる時、私はリスのように逃げまわった。私はこうして十年の間、絶えず神経を尖らしていたのである<sup>8</sup>。

引用は伊東が実父の葬式で実母を冷たくあしらう態度に驚きつつ、自分にも出身を隠した過去があるという「私」の告白である。この一節が削除された所以について、大久保も援用している呂の分析から見てみよう。

王昶雄は「奔流」を發表してから半世紀近く経った後、こんなにも大幅の改訂を行った理由は2つ考えられる。1つ目は、本人が「老兵過河記」で振り返ったように、当時日本の検閲機関によって強制挿入を命じられた段落だからである。2つ目は、作者が誤解を招きやすい段落だと判断したためである<sup>9</sup>。

「老兵過河記」は王が1982年に発表したエッセイであり、その中で「奔流」が初出時当局の検閲で勝手に改ざんされたとの回想が綴られている<sup>10</sup>。それを踏まえると、再録はともかく、王改訂版における再改稿は検閲前の原型に復元するためだという推測も成り立つが、作品の整合性の観点から2つ目の理由が合理的だと呂は主張する。その説明によれば、1979年初めての中国語訳が出て以来、日本の皇民化政策に迎合したいいわゆる「皇民文学」ではないかとの厳しい声が聞かれたため、王は疑われかねない記述の削除に踏み切ったのだという。

つまり、王改訂版における大幅な変更は、王が時代を慮って「皇民作家」狩りから保身せざるを得なかったものと考えられている。特に「私」に関しては、伊東に勝るとも劣らぬ内地志向者の一人とした原作の設定が、同化主義に傾くというスタンスを感じさせてしまう。それを弱まらせることが王にとって唯一無二の選択肢だったかもしれ

ないが、呂や大久保らに言わせれば、この改訂によりストーリーが破綻し、内地から台湾へと変化していく「私」の心理的プロセスがたどれないという中途半端な結果になった。

以上のことから、日本語作品が中国語訳を通して受容される際の1つの問題点が浮かび上がってくる。すなわち、内容が時代の制約などで意図的に変更される可能性があることだ。ましてや「奔流」の場合、原作者が自ら翻訳を手掛けたからには、それが真実として受け止められ、ほかの訳者まで影響を及ぼしかねない<sup>11</sup>。そうになると、日本語を解しない読者や研究者の間にミスリーディングが生じ、原作の本質を正しく捉えることもできなくなってしまう<sup>12</sup>。ところで、これまでに指摘されてこなかったもう1つの問題点が存在する。それは、訳者の意図しない訳語の選択により、原作と違う方向へ読み方が導かれてしまうことである。次節ではその具体例を交えながら見ていきたい。

#### 4. 訳語の選択

(お前は何という卑屈な男だろう。それは明らかに台湾そのものを卑下している証左ではないか。台湾人は決して中国人でもなければ、エスキモー人でもないのだぞ。それどころか、内地生れの人々と何ら異なるところがあるだろうか。誇りをもて！同じく日本臣民という誇りを)

私はいよいよ自分一人の泥芝居に疲れた時、定ったように自分にこう云い聞かせた。

これは前節で引用した「私」の告白の続きである。王改訂版では同じく削除される運命を免れなかったのだが、ほかの訳本ではそのまま残されている(表4)。丸括弧内の部分だけを比較すれば、訳者によって表現は多少異なるものの、台湾、内地、日本といった呼称を援用していることが分かる<sup>13</sup>。それによって浮き彫りになった三者の位置関係も原作の構図どおりだといえる。すなわち、台湾人が「内地生れの人々」と「同じく日本臣民」に内包されており、方程式で表すと「日本人=内

地人+台湾人」となる。

表4 訳文の比較①

林訳	你真是個卑劣的傢伙。那顯然是鄙夷臺灣的佐證。臺灣人決不是中國人，也不是愛斯基摩人。不僅如此，和內地出生的人，沒有任何不同。要有榮譽感！同是日本臣民的榮譽感。
王改訂	(削除)
鍾訳	你真是個卑劣的傢伙。那顯然是鄙夷臺灣的佐證。臺灣人決不是中國人，也不是愛斯基摩人。不僅如此，和內地出生的人，沒有任何不同。要有榮譽感！要有同是日本臣民的榮譽感啊。
張訳	你真是個卑怯的傢伙。那不是明顯地證明你卑視台灣嗎？台灣人絕不是中國人，也不是愛斯基摩人。豈止如此，台灣人和生於內地的人毫無兩樣呀。引以為傲吧！做為同是日本臣民的驕傲！
頼訳	你真是個卑鄙的人。那不是你瞧不起臺灣的明證嗎？台灣人絕對不是中國人，也不是愛斯基摩人。那和出生於內地的人又有什麼區別呢？你要覺得驕傲。驕傲自己也同樣是日本的臣民。

第2節でも少し触れたが、「日本精神」や「大和の魂」をめぐる主人公たちの行動や発言から総合すると、本作における台湾人と日本人は決して対極の概念ではない。むしろ、「台湾人<日本人」という数式で書き表せるように、前者は後者を構成する一員であり、あるいは後者は前者を包含する集合体であるといえよう。ところが、「私」が「何ら異なるところがあるか」と自分に言い聞かせていることから、もう一方の構成員である内地人と対等な立場ではないことが逆説的に浮かび上がってくる。つまり、同化の美名で提示された上記の方程式の裏には、「内地人>台湾人」という制約条件が潜んでいる。どうにかその不等号を取り除きたいことが、伊東や「私」を内地化へと邁進させ、と同時に柏年を国技である剣道に打ち込ませる最大の原動力ではないだろうか。

ところが、以上の図式と矛盾する結果をもたらす訳例も見られる。例えば、初めて「私」の家を来訪する伊東について、こういう描写がある。

今ここに一本島人が内地人の妻を娶り、言葉使いから挙動から、いやその根底に於いて、自らすっかり内地人になり切っている。

本島人とは、当時内地人に対置する用語として、台湾に本籍地を有する人を指す。原文の中で台湾人と併用されており、相互に置き換えることが可能な同義語である。しかし、内地人の場合は違う。表5にある林や王、鍾らのように日本人と訳してしまうと、現在の感覚からなら分かりやすいかもしれないが、日本人の中に別の構成員、すなわち台湾人がいることが認識できなくなる。そして、元々その下位概念にすぎないはずの台湾人は日本人と相対する立場へと持ち上げられてしまうのだ。もっとも、こうした「内地人=日本人↔台湾人」の図式が民族主義的視点からより歓迎されるだろうが、原作の提示したものとずれていることは否めない。

表5 訳文の比較②

版本	訳文
林訳	現在，在這裏，一個本島人，娶了一個日本人為妻，言語、舉動，根本上，完全變成日本人。
王改訂	現在，在這裏，一個本島人娶了一個日本人為妻，言語、舉動，根本上完全變成了日本人。
鍾訳	現在，在這裡，一個本島人，娶了一個日本人為妻，言語、舉動，根本上，完全變成日本人了。
張訳	現在這裡有一個本島人，娶內地人為妻，無論言語、舉動，不，從其根底完全變成內地人。
頼訳	現在，在這裡，有一個本島人，娶了內地人為妻，他的言詞、舉動，不！根性全部徹底地變身為內地人了。

もう一つの例は、「私」が伊東の生活ぶりに触発され、内地のことを思い出す場面である。

自分は南方生れの一日本人として甘んずることが出来ず、純然たる内地人に成りすまさねば気が済まなかった。進んで内地化しようと努めるのではなしに、無意識のうちに内地人の血が自分の血管に乗り移り、それがいつの間にか静かに流れているといったような気持であった。

これに対する訳文は表6のとおりだが、内地化志向への追及を避けるためか、王改訂版ではやはり削除されている。ほかで注目したいのは「純然たる内地人」という表現の訳し方である。張の訳

文では直訳に近い「純粹的内地人」であるのに対し、林や鍾らは「純粹的日本人」、頼は「真正的日本人」とそれぞれ訳している。要するに、前と同じくここでも内地人の訳語として日本人は妥当かどうかが問題となる。

表6 訳文の比較③

版本	訳文
林訳	自己不能甘於出生於南方的一個日本人，沒有成為純粹的日本人，心不能安。並不是自動地努力於內地化，而是在無意識中，內地人的血，移注入自己的血管，在不知不覺間，已靜靜地在流動那樣的心情。
王改訂	(削除)
鍾訳	自己不能甘於出生於南方的一個日本人，而非成為純粹的日本人，心便不能安。並不是自動地努力於內地化，而是在無意識中，內地人的血，移注於自己的血管內，在不知不覺間，已靜靜地在流動般的那樣的心情。
張訳	我不甘做為一個南方出生的日本人，非要變成純粹的内地人不罷休。不是強做努力要把自己內地化，而是無意識中，內地人的血流進自己的血管，不知不覺之間已靜靜地流著。
頼訳	我無法安於自己是出生於南方的日本人這個事實。如果不能完全變成真正的日本人的話，就不甘心。我認為，自己並非主動地努力成為内地人，而是在無意識之中，內地人的血將移入自己的血管，不知不覺地在我全身流動。

答えの鍵は前文にある。「南方生れの一日本人」とは台湾人を意味し、それも日本人として認められている台湾人を表している。この点において、「私」がなりたいと願う対象は日本人というアウトなものではなく、正確には北方に生まれた日本人すなわち内地人だと分かる。その気持ちは一方で台湾人が内地人と比べて「純粹」、「真正」な日本人ではないことを示唆することから、上記どの訳もあながち逸れていないが、前述した「内地>台湾」のような格差に囚われた「私」の苦悩をより正確に訳し出すには、原文に従って内地人と直接対比させることが必要であろう。

さらに付け加えるなら、柏年が留学先から「私」に宛てた手紙の中にも興味深い例が含まれている。

しかし私は立派な日本人であればあるほど、立派な台湾人であらねばならないと思い

ます。南方生れであるからといって、卑屈になることは少しもありません。こちらの生活に浸り込んで行くことが、必ずしも郷里の田舎臭さを卑下することには当たらないのです。母がいかにも不体裁な土着民でも、私には堪らなく恋しいのです。たとえ母が不格好のままこちらへやって来られても、私は少しも気が退けることは全然ないと思います。母に抱かれていれば、喜ぶことも悲しむことも、すべてが幼な児のように思いのままですから。

台湾人であることを誇る意識が読み取れるものとして、先行研究の中で必ずといっていいほど引用される一節である。けれども、冒頭の「立派な日本人であればあるほど、立派な台湾人でなければならない」という文は、いわゆる比例比較構文で、日本人と台湾人の間に正の相関があることを示している。もっと分かりやすくいえば、日本人であるその分に比例して台湾人にならなければならない必然性が高まるわけだ。このことから、ここでいう台湾人は前述と同様に、日本人に集合として含まれる台湾人にほかならない。そうしたニュアンスを含めて的確に訳されているかを見よう。

表7 訳文の比較④

版本	訳文
林訳	但是，我若是堂堂的日本人，就更非是個堂堂的臺灣人不可。不必為了出生在南方，就鄙夷自己。
王改訂	不錯，我今後非做個堂堂正正的臺灣人不可。不必為了出生在南方，就鄙夷自己。
鍾訳	但是，我愈是堂堂的日本人，就愈非是個堂堂的臺灣人不可。不必為了出生在南方，就鄙夷自己。
張訳	然而我認為要做一個偉大的日本人，則非先做一個偉大的臺灣人不可。不因為生於南方，就比他人卑屈。
頼訳	但是，如果我是個堂堂正正的日本人，那麼就更必須是個堂堂正正的臺灣人才行。不必因為出生於南方，而覺得卑屈。

まず、原文と同じく比例比較構文を使ったのは、鍾の訳である。「愈～愈～」は一方の事態の変化に伴ってもう一方の事態が変化するという意味の



構文で、現代中国語では「越～越～」とも表現される。次に、林訳の「若是～就～」、張訳の「要～則～」、頼訳の「如果～那麼就～」はいずれも仮定表現の構文に属する。主節の部分で比較を表す「更」や前後を表す「先」が使われているのだが、日本人と台湾人の包含関係よりも因果関係ばかりが強調されるきらいがある。そして、王の訳のように前提となる部分を飛ばしてしまうと、ますます原文と齟齬が生じるのはいうまでもないだろう。

## 5. おわりに

以上、「奔流」をテキストに日本語作品の翻訳について考察した。問題点として、今まで指摘されてきたように、早期の訳本では作者自身が時代への憚りから意図的に手を加えた可能性が挙げられる。一方、意図的ではないにしろ、訳し方によって内容の解釈が異なってしまうという点が本稿で新たに明らかになった。特に台湾、内地、日本あるいは台湾人、内地人、日本人といった用語は同じ漢字とはいえ、戦前と戦後で、または日本語と中国語で必ずしも同一の意味範疇とは限らず、自明のものとして置き換えられことに慎重さが必要である。

四方田犬彦は『翻訳と雑神』の中でローレンス・ヴェヌーティの翻訳理論について次のように要約している。

ヴェヌーティが強調したのは、いかなるテキストも本来的に不均衡にして異質である *heterogeneous* という事実である。翻訳者はしばしばこなれた翻訳の文体を誇示するが、そのとき生じているのは原著のもつ異質性の隠蔽であり、それが本来的に湛えていた政治性の軽減である。それに対抗して、異質性を前提とし、むしろそれに焦点を当てるような翻訳こそが現下では必要なのだ<sup>14</sup>。

これに照らして考えれば、中国語に訳されることは日本語作品にとって広く認識してもらう良い機会だが、翻訳の過程でその異質性と政治性をい

かに損なうことなく保てるかが課題といえる。そのような翻訳を通じて、例えば「台湾人」という戦後中華ナショナリズムの制約の下で固定化されたアイデンティティ概念が「無理にこじ開けられ、力づくで捩じ曲げられ、変容し」<sup>15</sup>だす。また、現代中国語では沿海部に相対する内陸部という意味のほか、しばしば香港やマカオなどに相対する中国本土を指す「内地」という地理概念の生成及びその奥に潜む中心／周縁の力学が日本語と中国語との「二重の運動」によって鮮明に浮かび上がる。つまり、アントワヌ・ベルマンが指摘するような試練を与えてくれる「他者」、「異なるもの」として、日本語作品の翻訳は台湾社会の言語使用と文化形成に「豊饒」をもたらすことが期待できるだろう。

## 注

- 2016年度現在、台湾文学の大学院を有する大学は成功大学、清華大学、台湾大学、中正大学、中興大学、政治大学、彰化師範大学、靜宜大学の8校（設置順、以下同）である。学科は真理大学、成功大学、靜宜大学の3校が開設している。一方、台湾文化や台湾語文など近いネーミングの大学院は、新竹教育大学、台中教育大学、台北教育大学、台湾師範大学、台南大学、東華大学、高雄師範大学の7校に設置されている。学科は、真理大学、中山医学大学、聯合大学、台中教育大学、東華大学、台湾師範大学の6校になる。
- データは2016年7月台湾国家図書館ウェブサイトにある「台湾博碩士論文知識加値系統」に基づいて統計した。
- 『台湾小説集』復刻版（『日本植民地文学精選集014〔台湾編〕2』）解説5頁。
- 歴史用語や地名などについて、本稿の問題提起の主旨に沿い、当時のまま使用することにしたが、分かりやすくするため、現在の呼称を括弧書きで1回目だけ記し、2回目以降省略とする。以下同。
- 初出は河原功、中島利郎編『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』（緑蔭書房、1999）、再録は前掲『台湾小説集』復刻版に準拠する。ただし、漢字や仮名づかいは現代表記に改めた。

- 6 呂興昌「文章千古事、得失寸心知－評王昶雄『奔流』の校訂本」『国文天地』7巻5期、1991、『台湾現代作家研究資料彙編59 王昶雄』所収、国立台湾文学館、2014、207-214頁。大久保明男「王昶雄『奔流』の改訂版について－日本語版との比較から」『論集』52、2000、177-198頁。
- 7 大久保、前掲論文、181頁。
- 8 以下を含め、原文の引用は全て初出版に準拠する。
- 9 呂、前掲論文、210頁。中国語訳は李。
- 10 王昶雄「老兵過河記」『台湾文芸』第76期、1982、『王昶雄全集』第4冊・散文卷3所収、2002、37-48頁。なお、王は「過去是一個新的起点」（『台湾時報』1985年5月14日、王昶雄『驛站風情』所収、台北県文化中心、1993、7-17頁）の中でも「奔流」創作当時の状況について振り返っている。
- 11 姚蔓嬪「王昶雄小説研究」（台湾師範大学国文研究所修士論文、2002）では、王改訂版以外の訳本はほとんどその影響を受けたという。
- 12 下村作次郎ほか編『よみがえる台湾文学－日本統治期の作家と作品』（東方書店、1995）の「解説」では、日本語原本ではなく中国語訳本をテキストとして採用する研究の妥当性が懸念されている。540頁。
- 13 頼錦雀による訳は初出と再録と手稿と合わせて3つあるが、本文で言及したように、初出と再録の間に構成上の差異がほとんど存在しないのと、手稿の再改稿に意図的変更があることから、初出の訳だけを取り上げることにした。
- 14 四方田犬彦『翻訳と雑神』、人文書院、2007、36頁。
- 15 アントワーヌ・ベルマン、藤井省一訳『他者という試練－ロマン主義ドイツの文化と翻訳』、みすず書房、2008、346頁。以下同。

## 謝辞

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号15K02457）による研究成果の一部である。